

ソンライのポピュラー音楽から見た マリ共和国・ティンブクトゥ地域の文化的特性

平成 20 年入学

参加したフィールドスクール：エチオピア

調査地：マリ共和国

佐藤浩介

キーワード： ティンブクトゥ地域，ソンライ，ポピュラー音楽，文化混濁

自分の研究テーマについて

西アフリカにおける音楽及びその周辺状況に関しては、これまで多くの研究や報告がなされ、その実態が明らかにされつつある。しかし、その多くがマンデ系民族についてのものであった。また、ポピュラー音楽の世界でも、マンデ系またはそのグリオ出身者が多数活躍している。以上のような研究成果や有名音楽家の活躍によって、西アフリカについてはマンデ系の音楽が殊更に注目され、その他の民族の音楽は等閑にされがちであった。

当研究では、マリ共和国北部のティンブクトゥ地域のポピュラー音楽に注目し、その成立過程や音楽的特徴、民族構成など地域的特性との関連などを考察することによって、西アフリカ音楽文化の全体像の解明に寄与することを目的とする。古くからの交易拠点であったティンブクトゥ地域には、ソンライ、フルベ、トゥアレグなど異なる文化的背景を持つ民族が、相互に深い関わりを持ちながら混住している。これらの民族もまた、グリオを含む社会階層を有し、マンデ系同様に音楽を特殊な技能と認めるとともに、ある種の禁忌として捉えてきた。マンデ系ポピュラー音楽が優勢のマリにおいて、ティンブクトゥ地域ではマンデ系言語以外で唄う歌手が人気を得ている。同時に、それらの歌手の多くは、当地の諸民族の複数言語で唄う。このようなポピュラー音楽のあり方は、絶対的に優勢な民族が存在しない当地の文化混濁を示唆するものであると思われる。



pic#1

ソンライ伝統楽器「ンジュルケル」を弾く
ヨロ・シセさん(マリ共和国・バマコにて)

フィールドスクールで得られた知見について

将来、実務家として職業を選択する、という観点から今回のエチオピア・フィールドスクールの思い返したとき、直接関係する講座といえば、メルカサ農業試験場における FRG という JICA の取り組みであったと思う。「成功している」とされる開発支援の現場を見

る機会は稀であり，その当事者から話を聞いたことは貴重な体験となった。現場で地域に根付いた取り組みを，職業人として実践する職員の方々の姿には，非常に清々しいものであった。

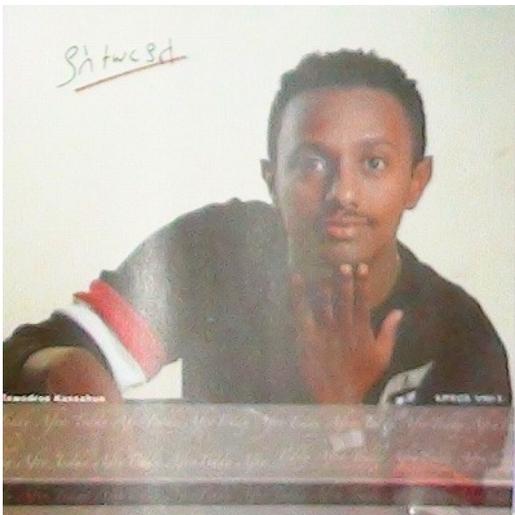
同時に，開発支援の抱える普遍的な問題点を垣間見ることが出来た。取り組みを受け入れ，支援の対象となった地域の農業従事者は，確かに以前よりも効率的に現金収入を得ることに成功しているように見えた。しかしながら，支援対象者及び支援対象地域以外に，自動展開的に取り組みが広がっていくか，という点においては，疑問を持たざるを得ない。また，JICA が撤退した後，それらの取り組みがどのように進展していくのかという点が，十分に展望されていないという印象を持った。

フィールドスクールで学んだことを，どのように研究テーマに生かせるか？

当フィールドスクールの講座演習と私の研究課題との間に，直接の接点を見出すことは難しい。しかしながら，講座演習以外の時間に，有意義な知見を得ることが出来た。

アジス大学生との会話からは，エチオピア音楽についての生の情報が得られた。中でも，レゲエを大胆に取り入れた音楽で，世代を超えた人気を博すテディ・アフロについての情報は，アフリカのポピュラー音楽におけるレゲエの影響について考える際に有用である。

レストラン YODO ABISSINIAN における音楽ショー見学では，伝統音楽とポピュラー音楽とが闘ぎ合う現場を目撃することができた。ショーでは，電気化されたクラール(伝統的弦楽器)が，伝統的奏法の他，オクターヴァーを使用することにより低音をも担当していた。これは，低音域によるリズムの強化を，ベースギターなどを導入せずに成そうとする実践であり，伝統音楽のポピュラー化の好例である。



pic#2

“YASTESERYAL”

Tewodros KASSAHUN (a.k.a. Teddy Afro)

メルカート内のCD店にて購入。

2005年発表。

現時点での最新アルバム。

FS 期間中に流行していた ‘Gudyaregen’ は，残念ながら未収録。



pic#3

よくある「ボブ・マーリー屋さん」。
メルカートにて。